

離散数学 資料2

集合と集合算

鴨 浩靖

2018年10月11日
(2017年10月12日2017年度版)
(2017年10月13日修正)
(2018年11月8日追記)
(2019年9月30日追記)
(2020年10月8~14日追記)

集合とは

- ▶ 集合とは、「ものの集まり」を抽象化したものである。
- ▶ 「 a は A の要素である」「 a は A に属する」を $a \in A$ と書く。
- ▶ $a \in A$ の否定を $a \notin A$ と書く。

集合の表記

列挙

要素を書き並べて {} で囲む。

例 {2, 3, 5}

集合の表記

内包

$\{x \mid \varphi(x)\}$ 条件 φ をみたすもの全体の集合

$\{x : \varphi(x)\}$ と書く文献もある。

集合の表記

分出

$\{x \in A \mid \varphi(x)\}$ 集合 A の要素のうち、条件 φ をみたすもの全体の
集合

集合の表記

分出

$\{x \in A \mid \varphi(x)\}$ 集合 A の要素のうち、条件 φ をみたすもの全体の
集合

例

$A = \{2, 3, 5\}$ のとき

$B = \{x \in A \mid x \text{ は偶数} \}$ とすると

$B = \{2\}$

集合の表記

置換

$\{f(x) \mid x \in A\}$ 集合 A の各要素に対して $f(x)$ を構成して集めた集合

集合の表記

置換

$\{f(x) \mid x \in A\}$ 集合 A の各要素に対して $f(x)$ を構成して集めた集合

例

$A = \{2, 3, 5\}$ のとき

$B = \{x^2 \mid x \in A\}$ とすると

$B = \{4, 9, 25\}$

空集合 \emptyset

要素をまったく持たない集合（列挙で書くと {}）

$X = \emptyset \iff$ 任意の x について $x \notin X$ が成り立つ

空集合

記法の注意

\emptyset は ϕ (ギリシア文字) ではない。

数の集合

\mathbb{N}	自然数全体の集合
\mathbb{Z}	整数全体の集合
\mathbb{Q}	有理数全体の集合
\mathbb{R}	実数全体の集合
\mathbb{C}	複素数全体の集合
\mathbb{H}	四元数全体の集合
\mathbb{O}	八元数全体の集合

区間

$$(a, b) = \{x \in \mathbb{R} \mid a < x < b\}$$

$$[a, b] = \{x \in \mathbb{R} \mid a \leq x \leq b\}$$

$$[a, b) = \{x \in \mathbb{R} \mid a \leq x < b\}$$

$$(a, b] = \{x \in \mathbb{R} \mid a < x \leq b\}$$

$$(a, +\infty) = \{x \in \mathbb{R} \mid a < x\}$$

$$[a, +\infty) = \{x \in \mathbb{R} \mid a \leq x\}$$

$$(-\infty, b) = \{x \in \mathbb{R} \mid x < b\}$$

$$(-\infty, b] = \{x \in \mathbb{R} \mid x \leq b\}$$

$$(-\infty, +\infty) = \mathbb{R}$$

开区間

閉区間

半开区間

半开区間

集合の相等

$$A = B \iff \text{任意の } x \text{ について } \left[x \in A \iff x \in B \right]$$

集合間の演算

二項演算一定義

$$A \cap B = \{x \mid x \in A \text{ かつ } x \in B\}$$

$$A \cup B = \{x \mid x \in A \text{ または } x \in B\}$$

$$A \setminus B = \{x \mid x \in A \text{ かつ } x \notin B\}$$

共通部分

合併（和集合）

差集合

集合間の演算

二項演算一定義

$$A \cap B = \{x \mid x \in A \text{ かつ } x \in B\}$$

$$A \cup B = \{x \mid x \in A \text{ または } x \in B\}$$

$$A \setminus B = \{x \mid x \in A \text{ かつ } x \notin B\}$$

共通部分

合併（和集合）

差集合

$A = \{0, 2, 4, 8\}$, $B = \{2, 3, 5\}$ のとき

$$A \cap B = \{2\}$$

$$A \cup B = \{0, 2, 3, 4, 5, 8\}$$

$$A \setminus B = \{0, 4, 8\}$$

集合間の演算

二項演算—性質

$$A \cap B = B \cap A$$

$$A \cup B = B \cup A$$

(交換律)

集合間の演算

二項演算—性質

$$(A \cap B) \cap C = A \cap (B \cap C) \quad (A \cup B) \cup C = A \cup (B \cup C) \quad (\text{結合律})$$

集合間の演算

二項演算—性質

$$A \cap (B \cup C) = (A \cap B) \cup (A \cap C) \quad A \cup (B \cap C) = (A \cup B) \cap (A \cup C)$$

(分配律)

$$(A \cup B) \cap C = (A \cap C) \cup (B \cap C) \quad (A \cap B) \cup C = (A \cup C) \cap (B \cup C)$$

(分配律)

集合間の演算

二項演算—性質

$$A \cap (A \cup B) = A$$

$$A \cap (B \cup A) = A$$

$$(A \cup B) \cap A = A$$

$$(B \cup A) \cap A = A$$

$$A \cup (A \cap B) = A$$

$$A \cup (B \cap A) = A$$

$$(A \cap B) \cup A = A$$

$$(B \cap A) \cup A = A$$

(吸収律)

(吸収律)

(吸収律)

(吸収律)

集合間の演算

二項演算—性質

$$A \cap A = A$$

$$A \cup A = A$$

(冪等律)

集合間の演算

任意個の演算—定義

I は空でない集合とする。

有限集合でも無限集合でもよい。

I の各要素 i に対して、集合 A_i が決まっているものとする。

$$\bigcap_{i \in I} A_i = \{x \mid \text{すべての } i \in I \text{ で } x \in A_i \text{ が成り立つ}\}$$

$$\bigcup_{i \in I} A_i = \{x \mid \text{どれかの } i \in I \text{ で } x \in A_i \text{ が成り立つ}\}$$

文脈から I が明らかなき場合は省略することもある。

$$\bigcap_i A_i \quad \bigcup_i A_i$$

集合間の演算

任意個の演算—性質

$$A \cap \bigcup_{i \in I} B_i = \bigcup_{i \in I} (A \cap B_i) \quad A \cup \bigcap_{i \in I} B_i = \bigcap_{i \in I} (A \cup B_i) \quad (\text{分配律})$$

部分集合（包含関係）

定義

$A \subset B \iff$ 任意の x について「 $x \in A$ ならば $x \in B$ 」

A は B の部分集合である。

A は B に含まれる。

部分集合

性質

$$A \cap B \subset A \qquad A \subset A \cup B \qquad (\#)$$

$$A \cap B \subset B \qquad B \subset A \cup B \qquad (\#)$$

$$A \cap B = A \iff A \cup B = B \iff A \subset B$$

部分集合

性質

$$A \subset A$$

$$\emptyset \subset B$$

相等性と部分集合

$$A \subset B \text{ かつ } B \subset A \iff A = B$$

全体集合

集合（仮に U とする）をひとつ決めて、 U の部分集合だけを考えることが多い。
そのとき、 U を全体集合と呼ぶ。

補集合

全体集合 U が文脈から明らかなき、

$$A^c = U \setminus A$$

A の補集合

補集合

性質

$$A \setminus B = A \cap B^c$$

補集合

性質

$$(A^c)^c = A$$

補集合

性質

全体集合を U とする。

$$\emptyset^c = U$$

$$U^c = \emptyset$$

補集合

性質

全体集合を U とする。

$$A \cap U = A$$

$$U \cap A = A$$

$$A \cap \emptyset = \emptyset$$

$$\emptyset \cap A = \emptyset$$

$$A \cup \emptyset = A \quad (*)$$

$$\emptyset \cup A = A \quad (*)$$

$$A \cup U = U \quad (\dagger)$$

$$U \cup A = U \quad (\dagger)$$

補集合

性質

全体集合を U とする。

$$A \cap A^c = \emptyset$$

$$A^c \cap A = \emptyset$$

$$A \cup A^c = U \quad (\ddagger)$$

$$A^c \cup A = U \quad (\ddagger)$$

補集合

性質

$$(A \cap B)^c = A^c \cup B^c \quad (A \cup B)^c = A^c \cap B^c \quad (\text{ド・モルガン則})$$

補集合

性質

$$\left(\bigcap_{i \in I} A_i\right)^c = \bigcup_{i \in I} A_i^c \quad \left(\bigcup_{i \in I} A_i\right)^c = \bigcap_{i \in I} A_i^c \quad (\text{ド・モルガン則})$$

補集合と部分集合

性質

$$A \subset B \iff B^c \subset A^c$$

直積集合 $A \times B$

集合の A の要素と集合 B の要素の順序対すべての集合

$$A \times B = \{(a, b) \mid a \in A \text{ かつ } b \in B\}$$

$A \times A$ は A^2 とも書く。

直積集合 $A \times B \times C$

集合の A の要素と集合 B の要素と集合 C の要素の三つ組すべての集合

$$A \times B \times C = \{(a, b, c) \mid a \in A \text{ かつ } b \in B \text{ かつ } c \in C\}$$

$A \times A \times A$ は A^3 とも書く。

もっと多くても同様。

直積集合 $A \times B \times C$

注意

$$A \times B \times C = \{(a, b, c) \mid a \in A \text{ かつ } b \in B \text{ かつ } c \in C\}$$

$$(A \times B) \times C = \{((a, b), c) \mid a \in A \text{ かつ } b \in B \text{ かつ } c \in C\}$$

$$A \times (B \times C) = \{(a, (b, c)) \mid a \in A \text{ かつ } b \in B \text{ かつ } c \in C\}$$

は厳密には異なるが、違いを気にする必要はないことが多い。

冪集合 $\mathcal{P}A$

集合 A の部分集合すべての集合

$$\mathcal{P}A = \{X \mid X \subset A\}$$

冪集合 $\mathcal{P}A$

集合 A の部分集合すべての集合

$$\mathcal{P}A = \{X \mid X \subset A\}$$

例

$$\mathcal{P}\emptyset = \{\emptyset\}$$

$$\mathcal{P}\{0\} = \{\emptyset, \{0\}\}$$

$$\mathcal{P}\{0, 1\} = \{\emptyset, \{0\}, \{1\}, \{0, 1\}\}$$

$$\mathcal{P}\{0, 1, 2\} = \{\emptyset, \{0\}, \{1\}, \{2\}, \{0, 1\}, \{0, 2\}, \{1, 2\}, \{0, 1, 2\}\}$$

冪集合 $\mathcal{P}A$

集合 A の部分集合すべての集合

$$\mathcal{P}A = \{X \mid X \subset A\}$$

例

$$\mathcal{P}\emptyset = \{\emptyset\}$$

$$\mathcal{P}\mathcal{P}\emptyset = \{\emptyset, \{\emptyset\}\}$$

$$\mathcal{P}\mathcal{P}\mathcal{P}\emptyset = \{\emptyset, \{\emptyset\}, \{\{\emptyset\}\}, \{\emptyset, \{\emptyset\}\}\}$$

補足：記法に関する注意

内包表記 $\{x \mid \varphi(x)\}$ のかわりに $\{x : \varphi(x)\}$ と表記する流儀もある。

空集合 \emptyset (円に斜線) のかわりに \emptyset (0 (数字) に斜線) を使う流儀もある。由来は \emptyset (ラテン文字 O に斜線)。ギリシャ文字 ϕ での代用は不可。

差集合 $A \setminus B$ のかわりに $A - B$ と書く流儀もある。

部分集合 \subset のかわりに \subseteq や \subseteqeq を使う流儀もある。最近は \subset が流行っているが、 \subseteq もがんばっている。 \subseteqeq はあまり見なくなってきた。

補集合 A^c のかわりに \bar{A} と書く流儀もある。間違っていないが閉包と紛らわしくなるので、お勧めできない。

順序対 (a, b) が开区間と紛らわしくなることがある。それを嫌って $\langle a, b \rangle$ と書く流儀もある。

冪集合 $\mathcal{P}A$ のかわりに $\mathfrak{P}A$ と書く流儀もある。今のところ、どちらが優勢になるかはわからない。

練習問題

1. 集合 $A_0, A_1, A_2, \dots, B_0, B_1, B_2, \dots$ を以下のように定義する。

$$A_0 = \emptyset$$

$$B_0 = \emptyset$$

$$A_{n+1} = \{A_n\}$$

$$B_{n+1} = B_n \cup \{B_n\}$$

このとき、 A_5 と B_5 を列挙の形で書け。

まとめ

- ▶ 集合の表記
- ▶ 空集合
- ▶ 数の集合
- ▶ 区間
- ▶ 集合の相等
- ▶ 集合間の演算
- ▶ 部分集合（包含関係）
- ▶ 全体集合
- ▶ 補集合
- ▶ 直積集合
- ▶ 冪集合